氏名（本籍）	和田　七洋（山梨県） わだ　ななひろ
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 124 号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 23 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	戦後グラフィックデザインにおける脱モダニズムに関する研究―横尾忠則，和田誠を中心とする
論文審査委員	主　査　　教　授　　笠　原　　浩
	副　査　　教　授　　関　村　　誠
	副　査　　准教授　　城　市　真理子

論文内容の要旨

本稿は第二次世界大戦後の日本における脱モダニズムがどのように起こったのかを当時人気のあった二人のデザイナー，横尾忠則（1936-），和田誠（1936-）の例を基に論ずるものである。モダニズムとは第二次世界大戦前，戦中の日本において主流であったデザイン様式で一切の装飾性，個性，地域性や伝統を排除し国際様式を追及するものであった。しかし戦後になるとその思想に反動する形で様々な若いデザイナー達が個性的な表現を用い脱モダニズムを図った。そのなかでも人気のあった若手たちによる展覧会が1965 年に行われた「ペルソナ」展である。本稿ではその「ペルソナ」展に参加した横尾忠則と和田誠に注目し，彼ら二人がどのように作品にスタイルを持ち込んだのかを明らかにする。同世代には田中一光（1932-2002）や細谷巌（1935-），永井一正（1929-）など錚々たるデザイナー達がいるなかで，決して彼ら二人をその代表と言うことは出来ないのだが，二人の脱モダニズムのアプローチが対局的であるという事から，同時に扱うことにより彼らの間に存在する他の「ペルソナ」のデザイナーはもとより，グラフィックデザイン業界全体を包括的に捉えることを目的としている。

二人が偶然同い年であったことから，戦争体験や学生時代，社会人時代などがぴったりと重なる。そのことに着目し，本稿は第一章幼少期（誕生～15 歳まで），第二章少年期（～22 歳まで），第三章青年期１（～28 歳まで）第四章青年期2（～33 歳まで）と時間軸に沿って章立てをする。このように時間軸を基本としたことで時代背景との関連は分かりやすくなったと思う。それぞれの章で扱う内容は以下の通りである。

第一章では戦争の体験とそれに対する二人の感覚の違いが後の作品における死生観のを生んだとした。横尾の作品には戦争を含む死や闇など暗いイメージを毒々しく描いたものが少なくない。一方和田は戦争をテーマとする作品ですらユーモラスに描いている。

このことは戦争に対し大変な畏怖を覚えたと同時に興味の対象とした横尾に対し，和田はそれを他人事のように捉えていたという幼少期の感覚の違いが基となっているとした。

また戦後の子供たちの娯楽の中心であった漫画や雑誌などについて議論し，似顔絵やイラストレイティブな作品を多く制作する和田が新聞漫画家の清水昆（1912-1974）の影響を受け，和田と比べ高いデッサン力を持つ横尾は劇画調のイラストを描く山川惣治（1908-1992）の影響を受けているとした。

第二章では高校入学から卒業，和田の場合は多摩美術大学時代まで，横尾の場合は上京までの期間を扱っている。この時期を横尾が兵庫県で過ごしたのに対し，和田は東京の世田谷であった。当時地方では未だモダニズムが根強かったのに対して，東京では既に脱モダニズムが始まっていたと考え，その風潮によって横尾がモダニズムのデザイナーを経由して脱モダニズムを図ったのに対し，和田はモダニズムを経ることがなかったとした。

第三章では社会人として二人が会社組織に属しながらどのように作風を成長させたかを議論している。既に日本宣伝美術賞などを受賞し，一躍脚光を浴びていた和田は，プロの制作の現場という環境において芽吹いていたスタイルの精度を上げる事に成功したと言える。またこの時期の和田の成長が傾倒するベン・シャーン（1898-1969）の強すぎる影響から逃れたことにあるとした。

和田と異なり転々と職場を変える横尾であったが，この時期にモダニズムと決別し，横尾独自の最初のスタイル（市松模様）を見つける。この行為の根底にはモダニズムのデザイナーとして著しい評価を得られなかったことがあり，先に評価を得ていた和田の模倣をする形で表面的なスタイルを用いたとのだと考えた。

第四章では横尾が「市松模様」のスタイルを放棄し，新たなスタイルを獲得するまでの経緯を解説した。「市松模様」が単に表層的スタイルであったのに対し，「隠したくなるような卑俗性の暴露」という思想を帯びたスタイルへと変容を説明した。このきっかけとしてアメリカで流行したプッシュ・ピン・デザインと当時強い影響を受けたという前衛芸術があるとした。

この時期には「ペルソナ」展が含まれるのだが，新たなスタイルを獲得した横尾が高い評価を得たのに対し，和田は低評価であった。この違いが和田の作風にも変化が起こり，後のスタイルが完成形に寄与したと考えられる。

この章では更に，「画家宣言」を行いアーティストとなった横尾と，現在ではイラストレーターではあるものの，商業美術の第一線にいる和田の岐路が「ペルソナ」展にあるとし，現代度々議論にあがるアートとデザインの関係と関連付ける事ができると述べた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、1950 年代から 60 年代にかけての日本におけるグラフィックデザインの歴史を横尾忠則と和田誠の対比を通じて、豊富な資料検討をもとに明確に描き出している。この両者が公私ともに互いに交流があって同年生まれでもあり、幼少期（誕生-15 歳まで)、少年期（-22 歳まで)、青年期１（-28 歳まで)、青年期２（-33 歳まで）と時間軸にそった構成区分がなされている。その中で、戦後日本のデザインの脱モダニズムの動きが具体的かつ包括的に捉えられており、理論構成の展開がたどりやすく、主張の明確な論文となっている。横尾や和田のグラフィックデザインの変容の経緯と展開が、具体的な「ペルソナ」展（1965 年）への参加、職場での活動の事例や、他者との影響関係の詳細なども含めて、両者における重要な契機が的確に紹介されて、わかりやすい文章で論述されている。この両者の比較検討を考察の軸にすることにより、脱モダニズムの流れが極めて明確に捉えられている。その際、彼らのデザインにおける作家性を、視覚的・観念的・無意識的の三つの側面で示しているスタイルの変遷に着目しつつ論述している。本論文の考察から、とりわけ横尾が前衛芸術に傾倒していくこともよりよく理解できる。また、両者の主作品の具体的分析も要所で適切にまとめており、論文の展開に説得力をもたせている。

以上のことから、本申請において論文合格とした。